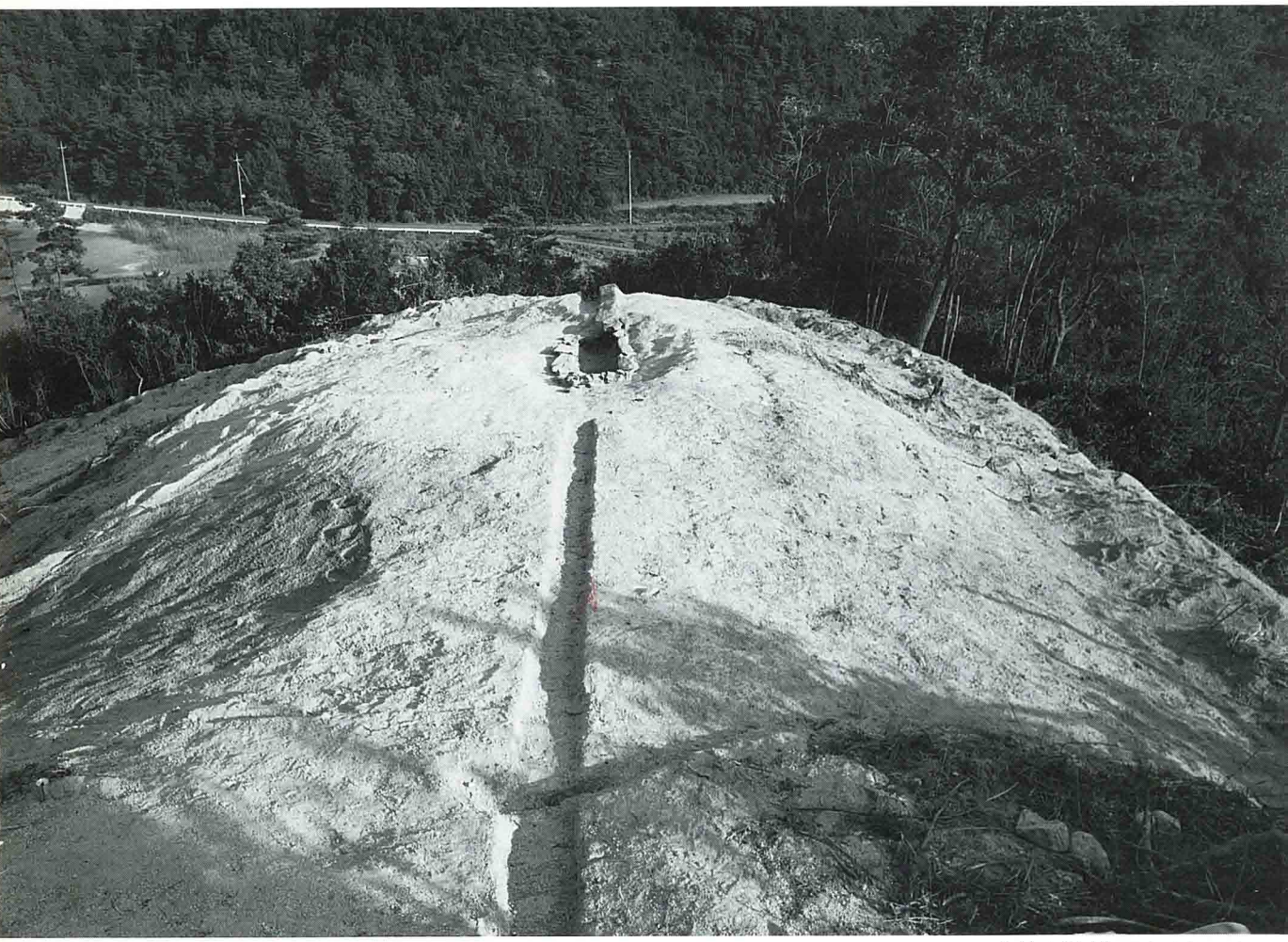
岡山県玉野市

滝（たき）・鐘鋳場（かねいば）1号墳



古墳全景（北西から）

1989年　3月

滝古墳群緊急発掘調査委員会

序

滝・鐘鋳場１号墳は、玉野市滝の丘陵上に所在した古墳です。当該地において土砂採取工事が実施されることになったため、関係機関による慎重な協議が行われましたが、やむなく発掘調査を実施し、記録保存をすることになりました。

調査の結果、古墳時代前期の小竪穴式石室を埋葬主体とする方墳であることが判明し、ここにささやかではありますが、その調査報告書を作成いたしました。多くの方々に御利用いただければ幸甚です。

最後になりましたが、調査にあたり御理解と協力をいただいた地権者の三輪勝重氏、工事者の有限会社コナカ建材、および関係者各位に対し厚くお礼を申し上げます。

平成元年３月　　滝古墳群緊急発掘調査委員会

委員長　　広 畑 浅 衛

目　次

Ⅰ．調査の経緯と経過……1

Ⅱ．調査結果……2

⑴位置と環境……2

⑵立地と墳丘……3

⑶埋葬施設……4

Ⅲ．まとめ……5

例　言

1.本書は玉野市滝1216番地ほかに所在した「滝・鐘鋳場１号墳」の発掘調査報告書である。

2.発掘調査は「滝古墳群緊急発掘調査委員会」が実施し、調査期間は昭和63年10月11日から15日までである。

3.本書の作成は岡山県古代吉備文化財センター職員平井泰男が行った。

4.本書に用いた図の方位は、１，２が真北、３，４が磁北である。また、レベル原点は任意であり、古墳位置の海抜高は約55mである。

5.図１は建設省国土地理院発行の50000分の１地形図（玉野）を複製したものである。

6.古墳の名称に用いた「鐘鋳場」という地名については、従来「金鋳場のシスト」などと表記されているが、(『玉野の文化財』,『玉野市史』)、調査・検討の結果土地台帳に基づき「鐘鋳場」と表記することにした。

Ⅰ　調査の経緯と経過

昭和63年夏、玉野市滝の丘陵の一部において土砂採取工事が計画された。工事予定地内には周知の古墳が存在しているため、玉野市教育委員会は、地権者に対し、文化財保護法第57条の２第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出を提出する様指示した。埋蔵文化財発掘の届出は、昭和63年９月１日付けで地権者から提出された。この届出に関して岡山県教育委員会は、地権者に対し、工事着手前に発掘調査を実施すること、および調査の結果重要な遺構等が発見された場合は、その保存等について別途協議する旨を通知した。

この通知に基づく関係機関による協議の結果、発掘調査が実施されることになった。発掘調査は「滝古墳群緊急発掘調査委員会」を設置して実施することになり、昭和63年９月８日付けで文化財保護法第57条第１項の規定にもとづく埋蔵文化財発掘調査の届出が提出された。

発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センター職員平井泰男が担当して、昭和63年10月11日から15日までのうち４日間実施し、地形測量、主体部の検出・実測、墳丘測量、墳丘断面図の作成および写真撮影等を行った。現地での調査にあたっては文化財センター職員宇垣匡雅、内藤善史の協力を得た。

滝古墳群緊急発掘調査委員会

職　名	氏　名	所　　属
委員長	広畑浅衛	玉野市教育委員会教育次長
副委員長	河本　清	岡山県古代吉備文化財センター 調査第一課長
委　員	伊藤　晃	岡山県教育委員会文化課課長補佐
〃	坂本文男	玉野市教育委員会社会教育課長
〃	名合照亀	玉野市文化財保護委員
〃(調査担当)	平井泰男	岡山県古代吉備文化財センター文化財保護主事
〃	宇垣匡雅	〃
監　事	佐々木　清	岡山県古代吉備文化財センター総務課長
〃	小西茂平	玉野市教育委員会庶務課長

事務局長	武下嘉之	玉野市教育委員会社会教育課課長補佐兼文化係長
事務局員	簾長英明	玉野市教育委員会社会教育課社会教育主幹
〃	井上節夫	〃　社会教育係長

II 調査結果

(1)位置と環境

滝・鐘鋳場１号墳は玉野市滝1216番地ほかに所在する。

玉野市は岡山県の南端部の児島半島に位置し、北は旧児島湾が広がり南は瀬戸内海をへだてて香川県高松市と相対している。

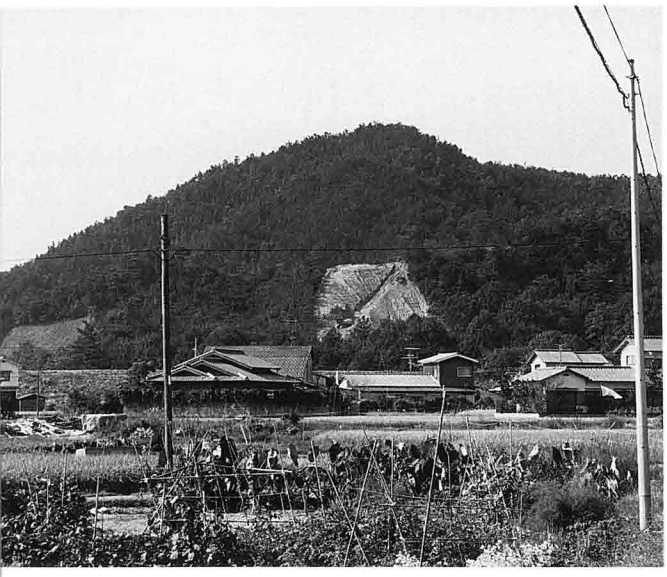
玉野市内には約80ヶ所の遺跡が知られている。これらのなかでは先土器時代のナイフ形石器の採集された「宮田山遺跡」(注1)、縄文時代早期の押型文土器が出土する「波張崎遺跡」(注2)、弥生時代後期から古墳時代前半の集落跡である「深山遺跡」(注3)、古墳時代および平安～鎌倉時代の製塩炉が発見された「沖須賀遺跡」(注4)などの重要な遺跡が調査、報告されている。

滝・鐘鋳場１号墳は玉野市の西端部に位置し、北東部には荘内の平野を望む小規模な舌状丘陵上に所在する。この舌状丘陵上には、１号墳の南に２基の古墳（１基は箱式石棺を内部主体とする）の存在が知られており、北方約300ｍの滝・先祖山の丘陵先端部にも竪穴式石室をもつ古墳（前方後円墳の可能性もある）や箱式石棺をもつ古墳が所在している。また、荘内平野をはさんで滝と相対する長尾の丘陵上にも箱式石棺を内部主体とする小古墳の存在が知られている。さらに荘内平野の周囲の丘陵斜面からは、弥生土器、土師器や石器などが採集されており、集落跡の存在が想定できる。

▲図１　古墳位置図（１/50000）

▼図２　古墳周辺地形図（１/5000）
（中央黒印が古墳の位置）

▼古墳遠景（中央工事部分頂上が古墳の位置）（北東から）



(2)立地と墳丘

古墳は南東にのびる舌状丘陵上に立地する。尾根幅は約10mと狭く、標高約55mの地点に古墳は築かれている。古墳からは、北東部に荘内の平野を望むことができる。

墳丘については、この丘陵が粗粒花崗岩で形成されているため崩壊が著しく、また調査前に南約半分が一部削平されており、本来の形状を把握することは困難であった。調査の結果、墳丘断面図の観察（図３）から西南部でわずかに盛土が残存しており、地山成形とわずかな盛土によって墳丘が形成されていたものと考えられる。

墳形については、墳丘がほとんど残存しておらず、また周溝も認められなかったため明確ではないが、地形測量の結果から約８×10mの方墳ではないかと考えられる。

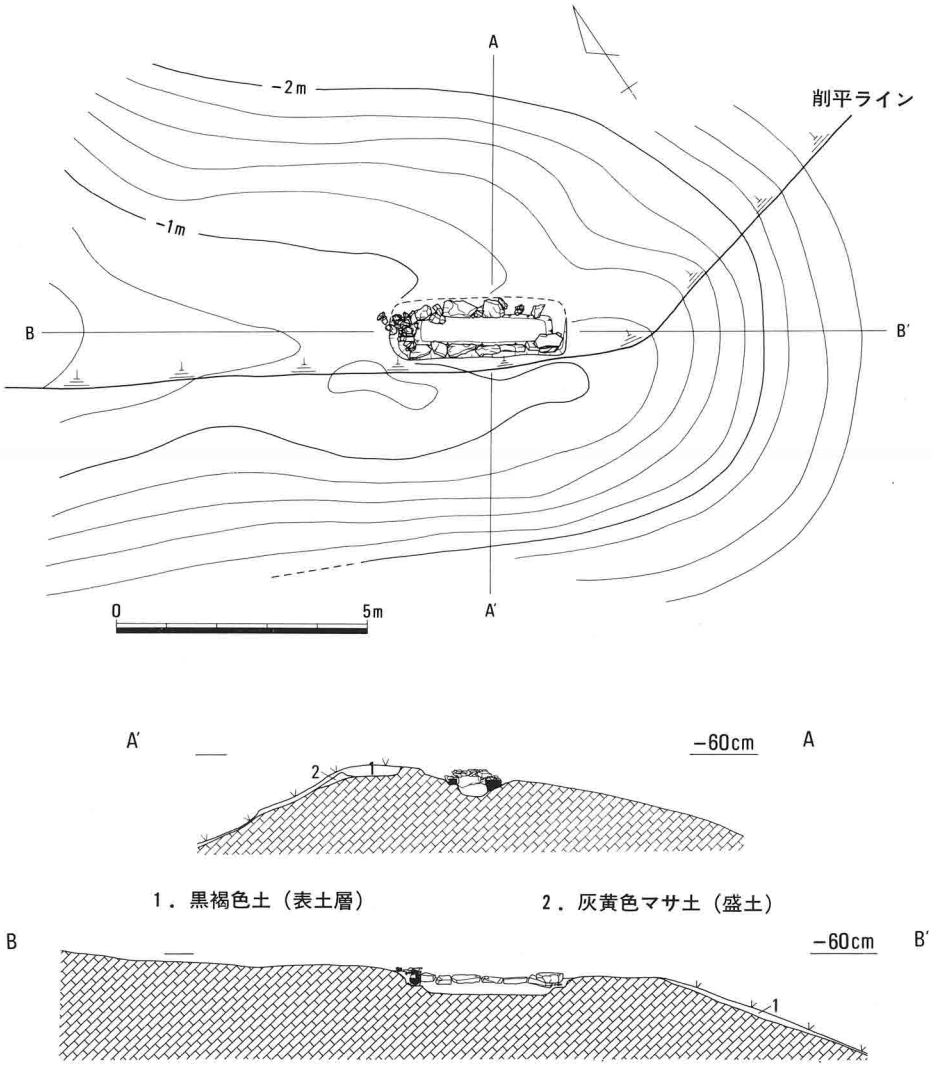


図３　墳丘測量図、墳丘断面図（1/150）

(3)埋葬施設

埋葬施設は、古墳のほぼ中央部に小形の竪穴式石室が１基のみ存在した。石室の主軸は墳丘長辺に平行する。

この竪穴式石室は、調査前の段階ですでに天井石は除去され、側壁の一部および南東側の小口部分も壊されていた。

竪穴式石室は、まず長さ約340cm、幅約120cm、深さ約40cmの土壙を掘り、その内部に構築されていた。石室の側壁についてはおもに最下段が残存しており、基本的には厚さ約10cmにそろえた板石を、側面をそろえて横に並べている。南東隅では同様の板石が２段残っており、側壁は本来２段積みでつくられていたものと考えられる。小口は北西側のみが残存していた。大きく２段からなり、下段にはほぼ小口幅に厚さ約10cmで長さ約50cmの石を立てて据えている。上段には10～20cmの礫を並べている。また、裏込めの礫も認められた。底面に石が敷かれていたかどうかは盗掘のため不明である。蓋石については、周辺に散乱しており、厚さ10cm前後の板石を４～５枚用いて蓋をしていたものと思われる。石室の石材については鑑定を実施していないが、周辺に産出する石である。

残存する石室の規模は、内法で長さ約270cm(推定)、幅約60cm、深さ約30cm（推定）を測る。

内部から遺物は全く出土しなかったが、かつて人骨が出土したという伝えがある。

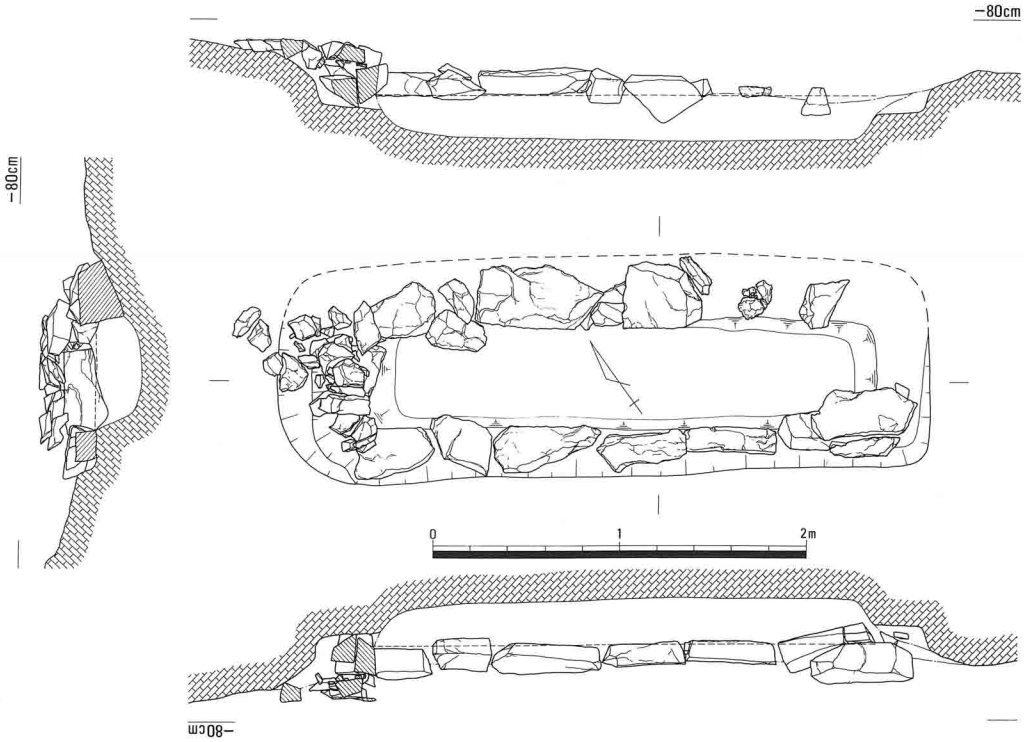


図４　竪穴式石室平・断面図(１/40)

Ⅲ まとめ

滝・鐘鋳場１号墳は、調査の結果、南東にのびる小さな舌状丘陵上につくられた小規模の方墳（約８×10m）で、墳丘は地山成形とわずかな盛土によって形成されていること、および埋葬施設は中央部に小形の竪穴式石室が１基のみ設けられていることが明らかになった。

ところで、当古墳の時期、性格については、出土遺物が無いため明らかではないが、古墳の立地、形態や埋葬施設から若干の考察を行ってみたい。

第１に、立地、形態については、当古墳と同じように、小さな尾根の稜線上に小規模の古墳が継起的に築造されている例が岡山県内には多く知られているが、発掘調査が行われ実態の判明したものは少ない。調査例のうち、「四辻古墳群」（山陽町[注5]）や「殿山古墳群」(総社市[注6])、「岩井山古墳群」(御津町[注7])、「横見墳墓群」(新見市[注8])、「竹田墳墓群」(鏡野町[注9]) などから明らかになった特徴は、いずれも約15m以下の小規模な方墳あるいは円墳で、地山成形とわずかな盛土で墳丘が形成されているものが多く、埋葬施設は箱式石棺が多いものの、箱式木棺や木棺粘土槨、小形竪穴式石室など多様で、同一墳丘内に複数の埋葬施設をもつ例が多いこと。また、副葬品を伴うものは概して少ないが、鏡や鉄器、玉類を少量出土する例があり、時期は、弥生時代末から古墳時代前期にわたって継続的に築造されるものと、古墳時代前期に新たに築造され始め、古式須恵器の段階まで継続するものとがあることなどである[注10]。

第２に、当古墳の埋葬施設である小形の竪穴式石室については、長さが約３m以下の小竪穴式石室が弥生時代末から古墳時代前期の墳丘墓や小古墳、あるいは古墳時代後期の古墳の一部に認められるが、当古墳と同一形式の調査例は知られていない。当古墳の竪穴式石室は、その形態から、やや規模が大きいものの箱式石棺を意識してつくられたものと考えられる。当古墳を含め３基からなる滝古墳群の１基に箱式石棺を埋葬施設とするものがあり、「殿山古墳群」や「横見墳墓群」に存在する小竪穴式石室の様に、多様な埋葬施設が共存する時期における１つの形態と考えられる。ただし、両遺跡では、小竪穴式石室は箱式石棺や木棺などと共に同一墳丘内に設けられているのに対し、当古墳では墳丘中央部に１基のみつくられていることが異なっており、このことは被葬者の性格あるいは地域性とも考えられるが現状では明らかにすることはできない。

以上、当古墳の立地、墳形、規模、埋葬施設を先述した諸遺跡の類例と比較して考えて、古墳の時期は、古墳時代前期で４～５世紀と考えておきたい。

また、荘内の平野をのぞむ丘陵上には、当古墳群の他に、滝・先祖山や長尾・鴻巣山などにも箱式石棺をもつ小古墳群の存在が知られている。これらは、荘内の平野を基盤として生活を営んでいた古墳時代前期の「氏族の成員」たちの墳墓と考えてよいであろう[注11]。

注

(注１)　西川宏・杉野文一「岡山県玉野市宮田山西地点の石器」『古代吉備』３号　1959年
(注２)　平井勝『玉野市波張崎遺跡確認調査報告』　玉野市教育委員会　1980年
(注３)　間壁忠彦「玉野市田井深山遺跡」『倉敷考古館研究集報』第６号　1969年
(注４)　福田正継『沖須賀遺跡』　玉野市教育委員会　1981年
(注５)　神原英朗ほか『四辻土壙基遺跡・四辻古墳群』　山陽町教育委員会　1973年
(注６)　平井勝『殿山遺跡・殿山古墳群』　岡山県教育委員会　1982年
(注７)　神原英朗ほか『岩井山古墳群』　御津町教育委員会　1976年
(注８)　下澤公明「横見墳墓群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15』　岡山県教育委員会　1977年
(注９)　今井堯ほか『竹田墳墓群』　鏡野町教育委員会　1984年
(注10)　これらの他に古墳群の一部が調査された遺跡として「陣場山遺跡群」(イ)や「法蓮古墳群」(ロ)がある。
(イ)福田正継「陣場山遺跡群」『岡山県史』第18巻考古資料　1986年
(ロ)村上幸雄『法蓮古墳群』　総社市教育委員会　1985年
(注11)　近藤義郎「第９章部族の構成」『前方後円墳の時代』　1983年

竪穴式石室（南東から）

岡山県玉野市
滝・鐘鋳場１号墳
1989年３月
発行　滝古墳群緊急発掘調査委員会
印刷　西日本法規出版株式会社